

テーマ：「エンピリカルソフトウェア工学とプロセス改善」

阪井 誠
株式会社 SRA 先端技術研究所
sakai@sra.co.jp

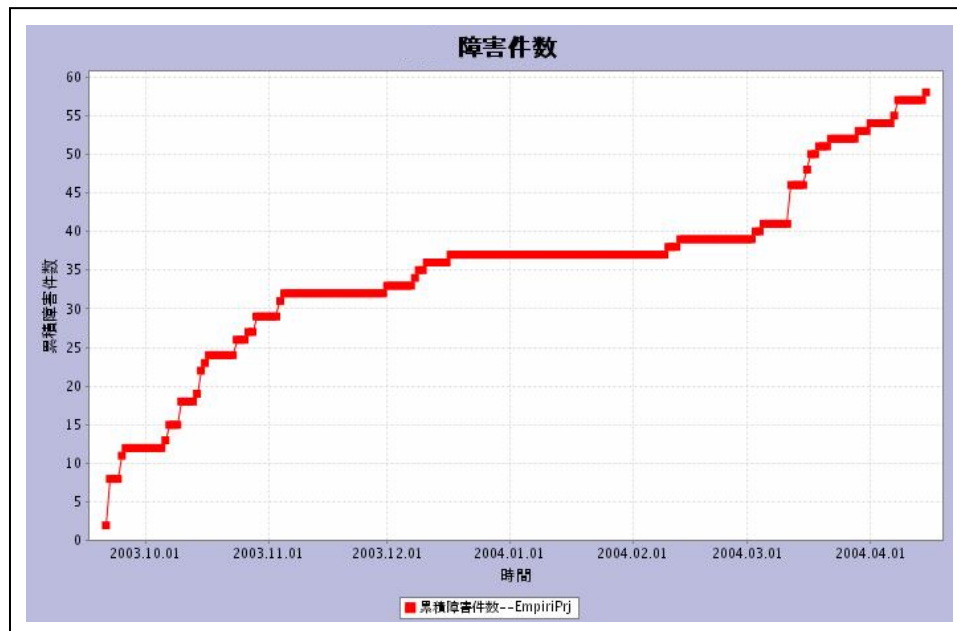
1. はじめに（ご自身のご紹介、テーマとのかかわり、パネルへの期待など）

協力会社の立場で顧客のソフトウェア開発に参加し、開発中のデータ収集にも協力してきた。企業によって詳細は異なるものの、集められるデータは規模、工数、試験項目数、不具合などの見積もりと実績のデータであり、収集の主たる目的は次の工程に進めて良いかを判断するためであった。

データを収集し、それに基づいた工学的なアプローチやプロセス改善は非常に重要であるが、目的や使い方によっては必ずしも良いデータが収集できない場合がある。本来の目標を見失いルールが形骸化しているならば、役に立たないデータを捏造することになる。定量的データを集めているにもかかわらず、状況を正確に把握せず評価基準のみで判断することは非常に危険である。

2. 議論（パネルでのスタンス、説明のポイント、課題提起など）

不具合データを収集する際の経験を基に、良いデータを集める方法を議論する。SRGM(信頼度成長モデル)は残存する不具合の予測に有効な方法であるが、試験項目に対して不具合が均一に分散していることが前提である。このことを考慮せずに、残存不具合数の予測のみを用いることにより、ルールは形骸化してしまった経験を述べる。下に示す障害件数のグラフをあなたはどのように判断するであろうか？



3. まとめ

データの判断に状況把握は不可欠である。また、開発者自身に役立たなければ、良いデータは集められない。